創立 20 周年記念ピアノコンサートは大成功

創立 20 周年記念ピアノコンサートの出演者たち

2008 年5月 17 日、北海道ポーランド文化協会創立 20 周年を記念しピアノコンサートを札幌コンサートホール *Kitara* 小ホールにて開催しました。

コンサートは「ショパンからバツェヴィチまで」と題し、フレデリック・ショパン、モーリッツ・モシュコフスキ、カロル・シマノフスキ、アレクサンデル・タンスマン、グラジナ・バツェヴィチというポーランドの５人の作曲家を取り上げ、当協会の会員を中心に 14 名のピアニストが演奏するとともに、アダム・ミツキェヴィチ、ツィプリアン・ノルヴィトという 19 世紀ポーランドを代表する詩人によるショパンゆかりの詩2編を、札幌在住のポーランド人ディバワご夫妻が朗読しました。当日は2階席までたくさんのお客様をお迎えし、コンサートは大成功でした。

記念コンサートを成功裡に終えて

薄井　豊美

創立20周年記念コンサートの準備は、演奏会実行委員会を設けて昨年まだ雪深い頃に始まりました。音楽関係の会員の皆様が出演を御快諾下さり、準備は順調に運びました。薫風爽やかな5月 17 日、多数のお客様をお迎えした本番は、真摯な熱演が続き、ポーランド詩の朗読の際、同時通訳が欲しかったとの御意見を頂き反省点となりましたが、充実した良い演奏会になりました。

これも偏に佐光事務局長はじめ、御関係の皆々様のお力添えの賜物です。本当に有難うございました。この度の演奏会を機会に、定期的な演奏会開催を模索しています。今後共変わらぬ御協力を宜しくお願い申し上げます。

（うすい・とよみ　演奏会実行委員）

「ショパン生誕 200 年記念」コンサートを終えて

ウィリアムス　美由紀

2010 年6月 18 日、札幌サンプラザホールにおいて協会主催の恒例のコンサートが開催されました。今年は、ポーランド生まれの作曲家ショパンの生誕 200 年の記念の年ということで、第一部はピアノソロ

によるショパンの名曲をお届けしました。第二部では、ポーランド出身の作曲家のみならず、ポーランドにゆかりのあるバラエティに富んださまざまな作品をピアノデュオで聴いていただきました。第三部では、長内勲先生指揮による男声合唱団「ススキーノ」の皆さんが、ポーランド国歌をはじめとするポーランドの歌曲をはじめ盛りだくさんの曲を披露し、コンサートを盛り上げてくださいました。お客様もたいへん多く、大きな会場がほぼ満席の盛会でした。

ポーランド出身の作曲家といえばショパンがあまりにも有名で、なかなかその他の作曲家にはスポットライトが当たることがありませんし、実は選曲もなかなか難しいところがあるのです。それでも、少しずつ、まだあまり知られていない作曲家の作品を、このようなコンサートでご紹介できることは大変有意義なことかと思います。ご協力頂いた関係者各位に心よりお礼申し上げます。

札幌におけるポーランドの文化を感じた日

ヴァルデマール・ヤロスラフ・ダブロフスキ

2010年6月18日、北海道ポーランド文化協会主催の毎年の音楽コンサートが札幌サンプラザホールで開催された。後援は駐日ポーランド共和国大使館や札幌市をはじめ日本ショパン協会北海道支部など多数。今回はこのコンサートに歴史上初めて男性合唱団「ススキーノ」が出演した。

男性合唱団「ススキーノ」とは

後列中央で歌う筆者

在札幌ポーランド人である私は「ススキーノ」のメンバーのひとりである。この男性合唱団は6年前に設立され、当初は11人のメンバーで活動を始めたが、現在、在籍者リストには24歳から73歳までの71名の名前が掲載されている。ほとんどが楽譜すら読めないこのアマチュアグループの指揮をとるのは、年齢は67歳だが、まるでティーンエイジャーのようなエネルギーをもった、北海道教育大学岩見沢校名誉教授の長内勲氏である。

「ススキーノ」は北海道で最大の男性合唱団であり、日本全国でも、もっとも大きなもののひとつである。アマチュアの合唱団なので、指揮者とピアニストを除き、出演料は受け取らない。今回は、在京のポーランド大使ヤドヴィガ・ロドヴィチ氏がポーランド共和国大使館文化部の予算から費用の一部を援助することを個人的に許可してくださった。

コンサートのプログラムでは、ショパン以外にもほかのポーランドや、外国の作曲家の曲も聴くことができた。「ススキーノ」はポーランドと、日本の作品を混ぜて歌い、自分たちの出演の最初と最後にポーランド国歌「ドンブロフスキのマズルカ」（本書 87 ページ参照）を2度演奏した。その合間には、ポーランド民謡「森へいきましょう」[1]や、ポーランドに関する日本の古い軍歌「波蘭懐古」[2]のほか、日本の曲をたくさん歌った。日本の曲は大部分が札幌と北海道に関連したものだった。

困難を極めた練習

このコーラスで、コンサートの準備は 2009 年末に始まった。その時、コーラスの指導部は6月のコンサートへの招待を受け入れることを会議で正式に決定したのだった。合唱団は、このコンサートでポーランド協会のピアニストたちの素晴らしい演奏の後に出演することになった。

～ 初めてのポーランド語 ～

このコンサートはショパン生誕200周年記念だったので、私がその準備にあたった。というのも合唱団はほとんどいつも日本人の観客の前に立ってきたので、これまで一度もポーランド語の作品をレパートリーに入れたことがなかったからである。

～ なかなか届かない楽譜 ～

さらに楽譜を手に入れ、言葉の問題を克服することはとても困難であることが明らかになった。ポーランド語は、発音の点では現存する言語の中でもっとも難しいもののひとつであり、日本人の大部分にとって学習するのはもちろん容易ではない。

楽譜の入手は、ポーランド大使館の文化部も少しは援助してくれたが、それでもこれだけテクノロジーの発達した時代に3ヵ月以上もかかり、最後にはロドヴィチ大使も全面的に協力してくださった。楽譜がコーラスの指導部に届いたのは、ようやく2010

年の3月末のことだった。

「ススキーノ」は毎年5月に北海道銀行主催のチャリティコンサートに参加しているため、札幌のポーランド文化の日のコンサートの準備は、このチャリティコンサートの後にようやく始まった。ポーランド語の3曲のメロディを覚え、しかるべき発音を習うためにコンサートのメンバーに残されていたのは、たった5回の練習のみだった。

長内勲氏指揮、男性合唱団「ススキーノ」

～ そして発音 ～

「ススキーノ」の中ではポーランド語を話せる唯一のメンバーだった私は、この重要な問題に対処することを余儀なくされた。「ススキーノ」の団員の平均年齢は 60 代なので、この企ては容易ではない課題だった。出演に関するこれらすべての問題にもかかわらず、合唱団員は「イェシュチェ」「デシュチュ」「ズ・ジェーミ」といった言葉に舌を噛みながらもストイックな落ち着きをもって臨み、最終的にはオリジナルの発音に近い音を出せるまでになったのだった。

◆ プログラム・ノートから ◆

[1] **「森へいきましょう」**原題は「娘さんが森へ行った」ということから、日本ではレクリエーション・ソング調に作詞されたもので、その内容は原詩のハンサムな狩人に対するたあいのない愛の歌とはおよそかかわりがない。原曲は、ポーランドで“マゾフシェ”とならび民族合唱舞踊団の双璧とされる“シュロンスク”の十八番（おはこ）で、その地方の民謡と思われるが、今ではポーランド全国で愛唱されている。日本でもよく知られ、歌われている曲ではあるが、もとはポーランド民謡である。

[2] **「波蘭懐古」**（ポーランドかいこ）明治 26（1893）年発表。在ドイツ公使館付武官・福島安正陸軍少佐が日本へ帰国の際、馬でドイツのベルリンから、ポーランドのワルシャワ、モスクワ、ウラル山脈越え、シベリア、蒙古、北満州を経てウラジオストックに至った1年4ヵ月間（1892.2-1893.6）の単騎行を題材にして、国文学者の落合直文が作詞した長篇詩の内の、ポーランドの部分をとった作品。作曲者は不明。

写真：富山 信夫

「第 16 回ショパン国際ピアノコンクール」第3次予選を鑑賞して

水田 香

ショパン生誕 200 年祭で世界中が盛り上がる昨 2010 年 10 月、「第 16 回ショパン国際ピアノコンクール」鑑賞のため出かけることになりました。きっかけは友人同士の冗談、行く？行かない？の会話に始まり、「生誕 200 年の今年、ショパン博物館が新しくなりました！」のニュースに、「行くのは今」と思い立った次第です。

雪でも降りそうな寒さの中、古都クラクフで手に入れ羽織ったショール、その民俗衣装風な濃い青の縁取りを見ながら今でも心に思うのは、「歴史の偶然性」と「世界を身近に」感じた事実です。短いながらショパンの故郷ポーランドに滞在中に感じた事、コンクールの第3次予選（10 月 13–15 日）20 名の演奏を聴いた印象をお話ししてみましょう。

ショパンの資料が充実

ポーランド到着の翌日、ショパンの生家や洗礼を受けた教会、彼の文化性を育てたワルシャワの街、そして新しく整備された**ショパン博物館**を訪ねました。

今まで国内に散在していた資料や楽譜を1か所に集めて保管、専門的な研究資料を提供する一方で、一般市民への普及活動にも努めています。貴重な資料は時代別にコーナーに区切って最新式の電子ブックを使って展示、引き出しを開けると収納の楽譜通りに音が流れる電子機器も備え、シ

ョパンの音楽を容易に体感できる仕組みになっています。「小学生向き」の特設コーナーには、ショパンの生涯が分かり易く（視覚的に）展示され、引率者と小学生の集団が入れ替わり立ち替わり見学、若い人への教育に余念がありません。ポーランドの取り組みの熱心さに感心したものです。

歴史の偶然性を感じる

ワルシャワやその近郊の気候は道央そのもので、親しみのある木々や植物に囲まれた広大な公園の一角に**生家**があります。新しく整備された屋内には当時の暮らし振りが美しく再現され、庭にオープン可能な部屋は演奏会を開くことができる設えになっています。周辺は今なお緑豊かな農村地帯で、ワルシャワからバスで 40 分以上もかかります。

もしもショパンの父親がワルシャワの貴族の館で教育の仕事に就かず、息子がこの農村地域で少年時代をずっと過ごしたなら、伝記に語られる様な少年時代――ピアノを弾いては即興的に曲を生み出し、外国から来たオペラを見ては感激してピアノ作品に取り入れる――事は起こらなかったでしょう。他の作曲家、例えばモーツァルトやベートーヴェンには強烈な面――どの様な環境にあっても作曲活動を続ける――を感じますが、ショパンの場合、ピアノとワルシャワとの出会いが無ければ、恐らく多くの作品を残さなかったでしょう。またウィーンへの演奏旅行が一転して亡命生活に変わる事が無く、あの時再びポーランドに戻って平凡に暮らしたなら、「バラード」「ソナタ」「マズルカ」等の複雑な心情を語る作品は書かなかったと思うのです。当然、現代において世界中が注目する「ショパン国際ピアノコンクール」も生まれなかったという事になります…。

世界が身近になった瞬間

［会場］日頃オーケストラの演奏会が行われるワルシャワ・フィルハーモニアホールは街の中心地、ビル街の仲通りにあり、見つけるには少々苦労ですが、玄関前に掲げられた国旗が国際的な雰囲気を盛り上げています。「背の高い黒い鉄柵や大理石で作られた重々しい階段、とても格調高いホール…」。しかし、その玄関前では、気取らない格好の係員が、毎日段ボールからコンクールのニュース速報（演奏批評とカラー写真入り）と演奏 CD を取り出しては誰にでも無料配布する、その拘り（こだわり）の無いフリーな発想に、とても感心しました。

フィルハーモニアホール
前で筆者（右２人目）

［舞台］左右一杯に大きな赤い花が形作られ、その手前に白く大きな文字 *Chopin* が掲げられています。多分ショパン自筆サインの拡大でしょう。舞台に彩と晴れがましさとを添えています。演奏開始直前に演奏者の名前、プログラム、演奏者自らが選んだピアノの機種がアナウンスされます。客席のどこからも演奏者が身近に感じられる舞台の高さで、コンクールという事を忘れさせる雰囲気です。今回からイタリアのピアノ「ファツィオリ」が使用機種に入りました。ピアノ自体が歌っているような美しい響きを感じます。

［観客］会場は毎日、午前と午後で客席を入れ替え、会場内には常に日本人が多く、ロシア人の演奏の時には先生風の集団が現れ、ポーランド人の演奏時間帯にはドレスアップをした観客が多くなり、大きな拍手と声援で演奏者を盛り上げました。

［審査員の様子と観客］第3次予選初日、我々の席は2階審査員席のすぐ右手。審査員団入場の途端、それまでの疲労の大きさが手に取るように分かりました。それを労わるかの様にテーブルにはチューリップでしょうか、黄色の花束が美しく飾られています。世界の名演奏家、名教師であるヤン・エキエル、アルゲリッチ、ハラシェヴィッチらに加え、アジアからダン・タイソン、フー・ツォン、日本の小山実稚恵氏も参加していて、とても親近感を持ちました。

［コンクールの演奏］第3次予選では約1時間の課題を休憩を取ることなく弾き続けます。「ソナタ」と「幻想ポロネーズ」を含め、事前申請曲目中、まだ演奏していない作品を組み合わせるため、「マズルカ」「ポロネーズ」「バラード」「スケルツォ」「エチュード」「プレリュード」など、多様なプログラムが楽しめます。「日本人の第2次予選通過者は0」とのニュースを当地で知り、皆…、しかし、その分、各国の演奏者を冷静に観察することができました。

ロシア勢の演奏は共通して音楽の構成とテクニックが強固で、それに均整のとれた音楽性と各々の個性が加わります。ポーランド男性2名の演奏は控え目ながら、1つの音、1つの休符にもショパンに対する思い入れの深さが感じられ、イタリア人のショパンには歌心が溢れています。「ソナタ」2曲と「幻想ポロネーズ」を並べた強靭なテクニシャンのアメリカ人女性、大変にエレガントで洒落たショパンを披露したフランス人も…。東洋系の人は和声感が希薄ながら集

中力抜群で、複旋律の多層構造を面白く表現。

この様に各国の期待を背負う若手ピアニスト達が「世界の頂点に通じる扉を必死で開こうとしている」真剣な姿をリアルタイムで見ることで、世界との距離感が一気に縮まり、最後にはどの国のピアニストも応援したいと思う経験をしたのです。

［結果発表］第3次予選通過者（本選で協奏曲を演奏）の発表を待つ間、終始笑顔でプレスの質問に答え市民のサインに応じるロシア人達は自信に溢れ、今回優勝のユリアンナさん(Yulianna Avdeeva)も例外ではありませんでした。結果はロビーでアナウンス（5位までの6人にロシア人が3人入賞）。やはりロシア勢は強かった!!

世界に音楽を発信できる人を育てる

今は世界の情報がパソコンで即座に手に入る時代です。すでにコンクールの結果とすべての演奏もインターネット上で公開されていますが、実際に「見て聴く」事は、単に知識を得る以上に大きな意味があると、今回の海外研修で実感できました。

私は日頃、ピアノ演奏の仕事を目指す大学生の指導に当たる毎日ですが、今回の経験をきっかけとして、新たな目標とエネルギー――世界に音楽を発信できる人を育てる――を得た事が大きな収穫だったと言えるでしょう。今後、学生達とともに頑張りたいと思います。

〈第63回例会〉

レクチャー・コンサート

21 世紀のショパン像 ～新書簡集出版を祝って～

安田 文子

ポーランドで刊行が始まった新書簡全集の日本語訳（ショパン全書簡：1816-1831年：ポーランド時代、岩波書店、2012）の出版を記念して、2012 年11月17日に北海道大学情報教育館で第 63 回例会レクチャー・コンサートを行いました。

ショパンの命日が 10 月 17 日であること、そして北海道ポーランド文化協会の初代副会長で、日本におけるショパンのピアノ教育の草分けであり、私の恩師でもある遠藤道子先生が 2011 年 11 月 24 日に亡くなられて約1年経つことから、追悼の意味を込めて 11 月 17 日にレクチャー・コンサートを行うことになりました。音楽評論家、ショパン研究の第一人者である三浦洋先生=写真右下=がお話をされ、その内容にちなんだショパンの曲を坂田朋優さん、高橋健一郎さんと私の3人で演奏しました。

新書簡集はポーランド語原文から訳された初めての日本語版で、全 700 ページを超し、ショパンをとりまく人物、生活環境、政治的・社会的・文化的背景に関する詳細な注釈がぎっしりと書き込まれていて、その内容の充実ぶりは驚くばかりです。

第1部：21 世紀のショパン像～全書簡集新訳の意義、正しい表記への修正、ショパンが書いた「シャファルニャ通信」に関する新解釈などについて～

今まであったシドフ版やヘドリー版は、不正確な記述があり、量も不十分でした。新書簡集は完全で厳密な校訂のもとに出版され、ポーランド語から日本語に直接翻訳されていて、ようやく本来の意味のショパン像が築かれるきっかけになると説明されました。

また新書簡集では、ポーランド語の発音に忠実にカタカナ表記がされています。「マズルカ」が「マズレク」に、あるいはショパンが書いたところだけ「ミツキェヴィチ」が「ミチキェヴィチ」となっています。これは間違いではなく、ミツキェヴィチの故郷のリトアニアのノヴォグルデク地方ではこう綴るのだそうです。

三浦洋さんのお話